平成２４年第３回定例会　市長所信

皆さん、おはようございます。
７月２８日に市長に就任しました板倉正直です。印西市長就任にあたり、これから少々、お時間をいただき、所信を述べさせていただきます。

東日本大震災、そして福島の原発事故から１年半が過ぎようとしております。日本人が今後、原子力とどのように向き合うべきなのか、というテーマが今、政治の最重要課題になっております。
そして、原子力をめぐって、注目すべき現象が起きております。それは、「７０年安保」以来、日本ではあまり見られなかった「市民によるデモ」の復活です。毎週金曜日の夕刻、永田町でデモが開催され、万単位の市民が集まっております。
「市民が既成政党や既存の政治家に重要な問題を託すことができなくなって、直接、声を挙げ始めた」。作曲家であり評論家でもある坂本龍一氏は、原発事故に対する「市民の異議申し立て」について、このように分析しております。
既成政党、既存の政治家への不信の高まりは、中央政界だけの出来事ではありません。７月８日の印西市長選挙が、おおかたの予想に反して、私の地滑り的勝利に終わったのは、私、板倉への支持、というよりも、これまでの印西市の市政、そしてそれを作ってきた政治家に対する不信、批判が表面化したから、と考えることができそうです。
とすれば、私は、今回の地滑り的勝利を、単純に喜ぶわけにはいきません。私も過去３７年間にわたって市議会議員として印西市政に関わってきたからです。私は、これまでの印西市政に対する不信を払拭するべく、市政を刷新するため、市民の声にしっかりと耳を傾け、「市民目線」を市政の基本として、各施策に取り組んでまいる所存です。

ここで市民の信頼を取り戻すべく「新しい印西市」が迅速に取り組まなければならない課題として掲げた公約を述べさせていただきます。

第１に、ゴミ焼却場の再検討です。印西市は、印西地区環境整備事業組合の構成員として、ゴミ焼却場の９住区への移転計画を白紙撤回することを提案してまいります。
２００億円をかけ、ＵＲ都市再生機構から４０億円で土地を買う、という無駄遣いは止めなければなりません。ゴミ焼却場の移転の是非が市長選の最大の争点となり、民意はハッキリしたのですから、印西市は白井

市、栄町と協議しつつ、この計画を撤回していきます。短期間のうちに、徹底してゴミを減量しながら、そのうえで、どの程度の規模のゴミ焼却場が、いつ必要で、それはどこに建設するべきなのかを再検討してまいります。

第２に、二次救急病院の整備です。緊急案件として市内に二次救急病院をつくる必要があります。平均４４分、という長い救急搬送時間は、速やかに短縮しなければなりません。市民の安全・安心に関わる大きな問題です。昨年度、千葉県から病床配分を受け、二次救急を計画している医療機関に対しては、計画どおり救急医療に対応する施設の整備を進めるよう、印西市としても強く要望してまいります。

第３に、北総線の運賃値下げ・買い物の問題に関してです。北総線の高額運賃が改善されない限り、印西市の発展は望めません。今まで以上に、積極的に鉄道事業者や国・県に働きかける必要があります。また、印西市は、北総鉄道株式会社の株主ですので、同じ株主である千葉県を初め、沿線市とも連携し運賃値下げのため、積極的に行動してまいります。

また、高花、西の原、いには野、滝野地区などからの商業者の撤退は、近隣住民の多くが不満をもっています。その他、既存地区においても、車を運転しない人たちが買い物に不便を感じていますので、これらの方々を救済するための対策を講じてまいりたいと考えております。
あわせて、市内公共交通の充実にも取り組んでまいりたいと考えております。

第４は、子育て・教育に関してです。印西市は、子育て支援・教育に一層、力を入れていきます。市内でとうとう、保育園待機児童が出てしまいました。また、印西市では学童保育がない学校があり、また、適正規模の４０人を超えて８０人以上になってしまっている学童保育があります。これでは「子育て先進都市」とは言えません。次世代の育成のためには、思い切って予算を投入していくことが必要です。

小学校プール開放の再開、幼稚園、保育園の保育室・小中学校の一般教室の冷房化、私立幼稚園への補助など、子育て支援・教育政策には、早急に着手していく所存です。

さらに、子供たちの健康を守るため、放射能の除染については優先して引き続き実施してまいります。

「新しい印西市」の第５の課題としては、地域経済の振興、そして、自然や有形・無形文化財の保護に関してです。これまでの印西市はともすればＵＲ都市再生機構の言うがままの地域開発を行い、地元業者は冷遇されてきた、と言わざるを得ません。印西市は今後、千葉ニュータウン事業の収束を踏まえ、ＵＲとは是々非々で交渉を進めるとともに、地元業者が育つ仕組みを考えてまいります。

また、ＪＡ西印旛などと協力しつつ、特色ある農産品をつくったり、販路を拡大したりするなど、農業振興に力を注いでまいりたいと考えております。

最後の「自然や有形・無形文化財の保護」については、日頃から思うところがありますので、この場を借りて私の考えを述べさせていただきます。

イタリアの哲学者、グッツォーニは、人間には、「住まうこと」と「さすらうこと」という、２つの本質がある、と言います。

「住まうこと」とは、先祖代々、住み着いた土地に定住し、歴史と文化を受け継ぎつつ地域社会の中で生きていくことを意味します。

一方、「さすらうこと」とは、「住まうこと」とは対照的に、都市化しグローバル化した土地で、異質な他者とふれあいつつ、厳しい市場経済の中で取引を繰り返し、自分の能力を開花させつつ生きていくことを意味します。

今、印西市に住んでいる市民の皆さんにとっては、「住まうこと」「さすらうこと」の両方、どちらも重要なのであり、どちらか一方が忘れられるようなことがあってはならない、と私は考えております。

ここでは、「住まうこと」について具体的に話を進めましょう。

印西市の既存地区には、古い歴史があります。私たちの先祖たちは、この土地で主に農業によって身を立ててきました。旧印西、旧印旛、旧本埜、いずれも、関東の穀倉地帯です。また、「木下街道」という道の名前にもあるように、宿場街木下は、交通の要衝として長く栄えてきました。

このような歴史を持つ印西市の既存地区ですが、近年、米の取引の自由化や、後継者不足のために、農業は元気がありません。また、旧市街の商業を見ると、ニュータウン地区に進出した多くの大規模商業施設の影響などから、商店街も寂しさを増しております。

文化に目を転じると、印西には平岡、別所、泉、中根の獅子舞、浦部、中根の神楽、武西の六座念仏など、誇るべき伝統行事が数多くありますが、後継者難によって次の世代への承継が危ぶまれているものがありま

す。

「住まうこと」、つまり、歴史と文化を受け継ぎつつ地域社会の中で生きていくことが今、危機に直面しています。私は、地域社会、地域の歴史、伝統を大切にしていきたいと考えております。そのためには、地域経済を振興させ、地域文化、そして地域の自然を守っていく政策が必要です。

「住まうこと」を守る、という政策は、お年寄りを敬い、大切にする、ということを意味する、と私は考えます。印西の地で、長期間にわたって歴史と文化を背負い、「住まうこと」を実践してきたお年寄りからは、多くのことを学ぶことができるはずです。お年寄りの生活を支え、地域社会の中で、お年寄りの出番を増やし、世代を超えた交流が行われるような政策を印西市は具体的に考えていかなければなりません。

「住まうこと」を支援する政策は、印西市の既存地区に住んでいる人にとって不可欠であるばかりではありません。印西を生活する場所に選んでくださったニュータウン地区の市民にとっても、印西市は家族と生活を共にし、子育てをする唯一・無二の場所です。印西市は永年にわたって、その時代の「新住民」を受け入れてきました。２０世紀後半から２１世紀にかけて、この土地に住んでくださった皆さんも、すでに印西市の歴史の一部です。

自らが住居を構える土地に、誇りをもって「住まうこと」ができて初めて、人間は安心して「さすらうこと」が可能になる、とグッツォーニは言います。印西市にしっかりと「住まうこと」は、印西市民が今、そして印西の子どもたちが将来、東京や世界で「さすらう」ための基盤になるのです。

私の政治理念は、「市民からいただいた貴重な税金を、ゴミ焼却場の計画に代表されるような、無駄遣いをせずに、子育て・福祉・教育、生活インフラなど、市民のための施策に還元していく。」ということです。

そして、市民が豊かに「住まうこと」ができる「ふるさと」をつくる。既存地区とニュータウン地区の市民が、また、旧印西・旧印旛・旧本埜の市民が、それぞれの地域性を保ちつつも手を携え、誇りをもって「住まうこと」ができる印西市をつくる。

そのために私は、市民の声にしっかりと耳を傾け、汗をかき、懸命に努力し、とことん市民目線で各施策に取り組み「新しい印西市」をつくってまいりたいと考えております。

どうか、市民の皆さん、市議会議員の皆さん、私に力を貸してください。